

特色ある共同利用・共同研究拠点 期末評価結果

大学名	早稲田大学	研究分野	人文学、芸術学、芸術、芸術一般
拠点名	演劇映像学連携研究拠点		
学長名	田中 愛治		
拠点代表者	岡室 美奈子		

1. 拠点の概要 ※期末評価報告書より転記

[拠点の目的]

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館（以下、「演劇博物館」と言う）が運営する演劇映像学連携研究拠点（以下「本拠点」と言う）は、平成21年度より平成25年度まで共同利用・共同研究拠点として認定を受け、研究を推進してきた。本拠点は、学外の研究者・諸機関と演劇と映像をテーマとする共同研究を行い、平成14年度採択の21世紀COEプログラム「演劇の総合的研究と演劇学の確立」、及び、平成19年度採択のグローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」によって蓄積された研究資産の、より一層の社会還元と有効活用をはかることを目的とするものであった。COEプログラム（以下、「COE」と言う）は、博士課程在籍者を中心とする若手研究者の育成を主たる目的とする教育・研究プロジェクトであったが、演劇博物館の二つのCOEは、早稲田大学に留まらず日本全国および海外からも研究生を受け入れた点に大きな特色があった。それは演劇博物館が、日本の演劇映像研究を牽引し、国際的な学術交流の中核を担うことを自らの使命として明確に意識していたからこそ実現されたことである。実際、演劇博物館は二つのCOE事業を通じて大きな成果を挙げて国際的研究拠点として広く認知され、事後評価においてもきわめて高い評価を得た。

本拠点はCOEの成果を継承しつつも、研究に特化した拠点として多数の研究チームを擁し、演劇映像研究の発展に大きく寄与してきた。本拠点においては、拠点が研究テーマを提案するテーマ研究と、拠点の研究資源の有効利用を前提とする公募研究とを行ってきたが、公募研究の推進は若手研究者にも広く門戸を開放して研究の機会と環境を提供し、研究資源を共有するという演劇博物館の理念を継承・発展させるものであった。また、研究成果は、多数のシンポジウムや研究会、ホームページや出版物を通じて発表され、演劇映像研究の推進に貢献してきたのみならず、上映会や展覧会の開催等、演劇博物館ならではの方法によって広く社会に還元された。

共同利用・共同研究拠点として再認定されれば、本拠点は上記の理念をさらに推し進め、百万点を超える膨大な資料を収蔵するアジアで唯一の演劇専門博物館が母体であるという利点を活かし、演劇博物館に収蔵されながらまだ十分に学術的に活用されていない貴重な未発表資料群を研究資源として提供する予定である。こうしたアーカイブの積極的な公開は画期的であり、貴重な学術資料を大学や限られた研究者で占有するのではなく、国家的な文化資源として共有するための新しい試みとして位置づけられる。これは文化資源の学術的活用の一つのモデルとなりうるだろう。豊富な研究資源と研究環境の共有化を図り、国内外の演劇映像研究を牽引して学術研究の推進に寄与するとともに、研究成果を広く社会に還元することが、本拠点の目的である。

[拠点における成果及び目的の達成状況]

本拠点は、100万件を超える資料を収蔵する演劇博物館が母体であるという独自性を活かし、演劇博物館所蔵の貴重な一次資料を専門家チームによる共同研究に供することで各資料の潜在的価値を引き出し、充実した学術的成果を上げてきた。また本拠点は、一次資料の調査機会を提供することで個々の研究者やチームが成果を上げるのみならず、資料のデジタル画像と目録をふくむ共同研究の成果を一次資料のデータベース公開に直結させる枠組みを作ることによって、更なる研究へとダイナミックに資料の利活用を進める道を拓くことができた。

拠点認定期間の達成状況 本拠点が共同研究に供した研究資料は、演劇博物館の収蔵資料のうち、これまで十分に学術的に活用されていなかった未公開資料を始めとする貴重な非公開資料である。6年間で近代演劇2件（坪内逍遙資料、坪内士行資料）、現代演劇2件（寺山修司資料、伊藤道郎資料）、東洋演劇2件（中国演劇番付資料、福地信世資料）、初期映像文化1件（幻燈資料）、映画4件（淡島千景資料、映画館資料、立正活映資料、ロマンポルノ資料）、音楽2件（無声映画楽譜資料、榎本健一楽団資料）の、研究価値の高い多岐にわたる分野の資料、計13件をテーマ研究・公募研究に供した。これらの資料の調査に基づく成果は、研究論文95件、学会・シンポジウム等での口頭発表91件などの様々な学術的成果に結実し、映画や幻燈の上映を交えて多彩な成果発表を行い、注目を集めた。また、この共同研究における資料の考察・考証過程では資料のデジタル化と目録化を推進し、令和元年10月末日時点で総計7725件の資料目録、総計51660件のデジタル画像を蓄積した。この成果は、各共同研究チームの研究終了後にデジタル・データベースとして順次公開されており、令和元年度末には計13種のデータベース公開を予定している。本拠点はこのように、新しい学術論文や学術発表とデジタル・アーカイブ公開を組み合わせる共同研究の枠組みを作ることで、将来にも波及する演劇・映像研究の活性化と充実を図った。

関連の研究者コミュニティ、研究分野への影響・貢献 本拠点は、未発表資料を中心とする新資料を提示することで、演劇研究・映像研究のなかで相対的に研究者の層が薄く研究の充実が俟たれていた分野を中心に、研究の活性化を目指してきた。この事業は上述の通り、数々の研究論文や研究発表に結実したのみならず、データベース公開に直結する資料目録とデジタル画像の蓄積においても予想を超える成果を上げた。これらの成果は本拠点が編集・発行する『News Letter』やウェブサイト上で日英2か国語により発信した。また、演劇博物館の企画展示や常設展示などでも随時発表することにより、関連する研究者のコミュニティのみならず広く社会へ還元した。6年間の研究の蓄積である資料目録は令和元年度末に400頁を超える目録冊子として発行する。なお、共同研究に積極的に参加した若手研究者は共同研究の他の研究者とともに一次資料の分析と共同研究の経験を積み、研究者として著しい成長が見られた。本拠点の共同研究は若手研究者の育成の点でも、研究者コミュニティと研究分野に貢献するものとなった。

[機能強化支援が拠点の当初目的の達成に与えた効果]

当拠点や当拠点を運営する演劇博物館はこれまでも演劇研究・映像研究のハブとしての役割を担ってきたが、機能強化支援を受けたことで、海外での主催シンポジウムの実施などの国際的な研究連携・研究発信と、若手研究者の海外派遣事業など今後の国際研究を担う人材育成を推進し、日本を代表する演劇・映像研究の国際的な中核拠点としての役割を一層強化することができた。また、機能強化支援により高精細スキャナを導入したことで資料のデジタル化を促進し、演劇・映像研究の基礎資料のデータベースを大幅に充実させた。特に大きな成果としては、日本の技術力を活かした文理融合による新領域の開拓が挙げられる。くずし字判読支援事業では、最新のデジタルテクノロジーを活用することで、学生から外国の研究者まで誰でも直感的に古典籍資料を閲覧できるビューアを作成し、オンラインで閲覧できる環境を整えた。こうした取り組みは、日本の演劇映像資料への海外からの関心を高め、今後の更なる演劇・映像研究の発展と国際共同研究の活性化に貢献するものである。

2. 評価結果

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティにも貢献していると判断される。

(評価コメント)

当該拠点は、演劇と映像に関し、拠点が有する研究資源と研究環境の幅広い研究者による共有化を図り、国内外の演劇・映像研究を牽引して学術研究の推進に寄与するとともに、研究成果を広く社会に還元することを目的として拠点活動を実施している。拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティにも貢献している。

特に、未公開の所蔵資料に係る共同研究の実施や当該資料のデジタル化、目録化を推進するとともに、機能強化支援を有効に活用し、海外でシンポジウムを複数回主催したり、若手研究者を海外に派遣するなど、国際化や人材育成に努め、当該分野の活性化に貢献している。

今後は、関連資料のデジタル化や目録化を引き続き進め、当該資料の研究への利用につなげるとともに、これまでの拠点活動で構築した国際ネットワークなどを利用した国際共同研究の実施などを通じ、拠点活動の一層の充実に取り組むことが期待される。